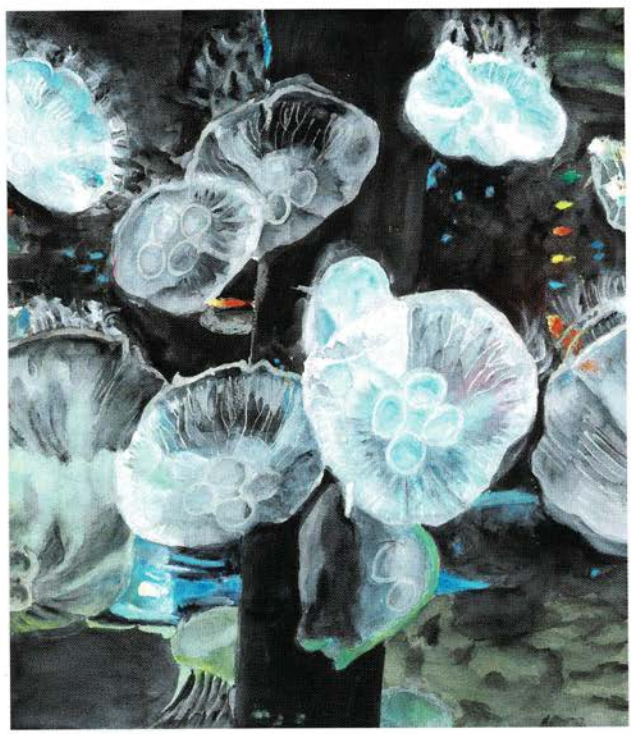
村野次郎創刊

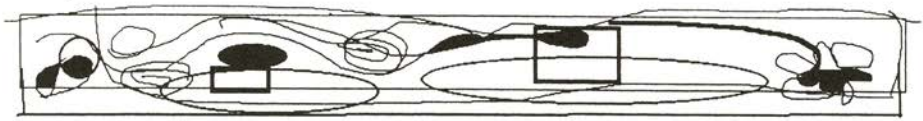
香蘭



2022年(令和4年)3月号

第 99 巻　　第 3 号　　通巻 1095 号

二〇二二年(令和四年)三月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第九十九巻第三号



香　　蘭

2022年（令和４年）３月号
第99巻　第３号　通巻1095号

目　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（79）……小原　裕光……表二
作品
一……2
二……23
三……30
推薦香蘭集……36
香蘭集……37
一頁公論（10）引っ越し大作戦……武藤　昭彦……15
作品一特選（一月号）……石井・伊藤（康）・岩田・川原・髙畠・長野・中村（か）・西野・本田・満木・宮口……16
作品二、三特選（一月号）……丑山・加瀬・庄司・中井（房）・中村（陽）・平川・松沢・伊藤（久）・小笹・柏原（貞）・河野・田村・能城……18
村野次郎への旅（143）……千々和　久幸……20
七首抄（一月号）……谷本・古澤・手島・徳渕……41
私の読む現代短歌（12）「生の深層」に手が届いた中城ふみ子……田中　あさひ……42
エッセイ・自由研究　伊勢物語から生まれた能……山下　紘正……44
焦点（一月号）日常の隣にある歌……千々和　久幸……46
作品評（一月号）作品一……石井　雅子……48
作品二……近藤　光子……50
作品三……市川　義和……52
香蘭集……坪　裕……54
耳言あれこれ（4）……田中　あさひ……56
緑地帯……和田・澤田・市川……57
明宝研究会　第一二四回十二月例会　比喩と象徴について……加藤　英彦……60
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……70
令和四年度　誌上全国大会　参加申込書・詠草用紙……81
歌会及び会合・会員消息・他……84
編集後記・新宿日記……89
令和四年度　誌上全国大会のご案内……表三
表紙絵……中村　陽子「浮遊」　目次・緑地帯カット……和田　和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（79）

われ癒えて庭にあふげば春の日の
あたたかくしてあまねかりけり

『樗風集』

小原裕光

昭和13年刊『樗風集』の昭和10年、小題「病後閑居集」にある歌で、ほのぼのとした歌です。

巻末記に、「難解な事象もいかに平易に表現すべきかに務めて来た」と書かれていますが、この歌もそうです、退院して帰った作者が久しぶりの我が家の庭に出て、春の日差しを全身に受け、開放されている様子が浮かびます。

一方、この歌の詠まれた前年の昭和9年から10年にかけては村野次郎と「香蘭」にとっては大きな危機、苦悩の時期であったことを思うのです。

北原白秋から香蘭顧問を辞退の申し出があり、そのことで村野先生は、その責任と心労から入院加療の身となりました。ようやく退院し、組織を改め、「香蘭」の主宰として再起する決意をされた時期と思われます。そのような背景にあった作者の今後への思いのあふれている歌と思うのです。

「香蘭」は2023年に創刊百年を迎えます。改めて村野先生の決意を思いつつ選びました。

（短歌新聞社文庫『樗風集』8頁、『村野次郎三百首』33頁に収録）

四選者の作品

歳の瀬　　平塚　千々和　久幸

新宿の街路樹が黄ばみ始むるを電車の窓に今朝は見て行く
駕籠で行くことを思えばねえおまえ東海道線はいつも遅れて
老いは首、背から足からなど思い前行く老人を見て後ろ行く
どちらともなく離れ行きたるが茫茫として十余年経つ
弁明のため夕焼けている野面かぜが記憶を攫いて行けり
人生に無駄なコーヒーなど飲んで遠い昔を手繰り寄せいる
ほかならぬわれが重荷になりいるを告げられており夜の電話に
無い便りは良い便りとも病棟に妻を残して十年の過ぐ

雪の元旦　　鎌倉　香山　静子

花もなく木の実もあらぬ冬ざれの狭庭に立てり年を重ねて
来年の暮れには如何なわれや在るあゝ一生は瞬く間なり
新年を迎へむと庭を掃きゆけるわれに纏はる枯れし草々
年末の盛り上がるテレビを観つつゐて振り返りみるこの一年を
この年も暮れなむとして様々な社会現象心をよぎる
新年の買ひ物をしつつ思ふなりいつまで出来るやかかる仕事を
ほろほろと天より落ち来る淡雪に北なる遠きふるさと思ふ
駒下駄を履きつつ社に参拝せし雪の元旦遠き昔の

山上の寺　　我孫子　丸山　三枝子

〈地震です〉アラーム鳴れば卓上のグラスの水が煌めきはじむ
くるぶしに蝶を飛ばせてくるヒール冬の冷気をかきたてて鳴る
宿願の竹寺詣で果たさんと特急ラビューに乗り込む母娘
林道のバスの駅舎はさびしくてそしてこんなになつかしかった。
どの庭も皇帝ダリアの花さかせ人は暮らせり奥武蔵野は
広庭のパンパスグラスほしいまま戦ぎに戦ぐ風をあつめて
怨念の鬼を隠せる森なるや森閑とあり冬日のなかに
霜月の医王山薬寿院八王子めぐりゆくなり　山上の寺

冬の窓　　東京　桜井　京子

朝なさな見上げて歩く木立にてケヤキ、クスノキ時々カリン
玄関の天井にとまつてゐる羽虫リビングに行きわが部屋に来る
飾りおくブーケのなかの千日紅だれより長く生きる気分だ
おざなりもなほざりもあれ冬の窓たたいて風が通り過ぎたり
あつけなく寝返る木の葉もありてよき左様ですかと去つてゆきたり
蟻殺し仕掛け置きしが冬が来て蟻はどこにもゐなくなりたり
チョコレート食べても食べてもやめられぬ私の岸辺を埋めゆく銀河
超高層を墓標のやうなとうたふ歌その片隅にこよひ眠らな

作品一特選

（一月号作品から）　桜井京子選

うろこ雲　習志野　石井雅子

秋の空さば雲いわし、うろこ雲何もしてないわたしも雲だ
風の音のカリフォルニアよりメールくる従姉のゆきさんその夫モレノ
幸せの国と呼ばれるブータンの輸入松茸食べてシアワセ
皇女（ひめみこ）を月に譬へてゐし男迎へに来たる髪を結びて
しく、しく、し泣いてるやうな形容詞シク活用を調べて泣くか

・変幻自在に次々に繰り出すウイットで読者を楽しませる作者。

新米　東京　伊藤康子

炊飯器持たずにすむらし箱買いのパックご飯に養われおり
陽だまりに力の限り伸びているひまわり咲かす十月の残暑
芽ぶきたる所で咲くしかありませんひまわり揺らす木枯らし一号
自転車のカゴに飛び乗る柿の葉を今日の栞と手帳に挟む
クビにしたバイトよ戻ってくれないか宣言明けの求人沸騰

・実社会で働きながら時代を呼吸し、社会と自己を凝視する。

超然とあり　安来　岩田明美

ゴーヤーの熟れてしまつた朱き実は息をひそめて地に還りゆく
かの朝（あした）二節啼きし蜩をそののち聴かず秋は圧（お）しくる
島根原発二号機再稼働にオーケーと頷きたるや出雲の神は
前を行く福留ハムのトラックは大きく右折し稔り田に消ゆ
「だんだんね」「だんだんよ」と言ひながら奥田さんとの電話終はりぬ

・三首目、原発再稼働への疑義を出雲の神に事寄せて批判する。

門灯の蜘蛛　川越　川原優子

口紅を忘れかけてる唇に少し紅さすマスク外して
払いても払いてもなお懲りもせず門灯の傍に蜘蛛は糸張る
黄と黒の色した大きな蜘蛛がいる生きんがために君も必死だ
頭から蓋被せらるる心地する今日もあなたに仕切られいたり
絵に描いた餅示される選挙なりそれに喜ぶほど愚かではない

・二首目～三首目、蜘蛛の姿に今を生きる作者が投影されている。

昭和の子ども　鎌倉　高畠憲子

栗が落ちれば栗を拾ひて送りくる歩けないよと言ひつつ父は
探すのを止めて帰つた鬼もゐた　はるかなり昭和の子どもの遊び
駄菓子屋の猫瓶に手を入れてみる「おや」ひいやりと昭和の空気
円空の彫りたる人麻呂像の笑むひたすらに詠み続ければよい
「よくのぼられました」と御住持あいさつす山の古刹の秋の歌会に

・四首目、真摯に短歌と向き合う作者に歌聖の声が響く。

指は惚けて　横浜　長野道子

無観客ピアノコンサートの動画きてラストの曲は『見果てぬ夢』なり
胸奥に握りこぶしのあるようなピアフの唄を秋の夜に聞く
ビニールの大ぶりの傘で秋雨の中夫はハローワークに行く
ロールケーキつまみオールフリー缶ビールの夫の新しい生き方
弾かぬまま月日の過ぎて音楽は聞くこそよろしと生き方変える

・四首目、五首目、夫婦が共に模索する新しい生き方に期待する。

癖　福岡　中村かよ子

遠回りする間に失うものばかり指折る我をいつも見ていた
ぐちぐちと時の隙間を埋めていくこれが望んだ私か、わたしよ
あるはずのない風鈴の音ひとつ歌い忘れた音符のように
人の手の生温かさに気づく今朝立候補者のふいの握手に
そこらじゅうブラックホールがあるような私の目眩い秋の真ん中

・ブラックホールの内側から対象を見るような独自性がある。

夕色　東京　西野美智代

わが庭の金木犀が発奮し今年三度(みたび)の芳香放つ
解体工事のグレーシートに遮られ私の空は台形となる
夕色の深まる頃に見つかりぬ冷蔵庫内に隠れゐし鍵
店仕舞ひの貼り紙につい買ひ込みし和紙を遺品にしてはなるまい
もう少し生きて見たかり藤井棋士の勝つてはにかむ和服姿を

・四首目、五首目、残り時間に思いを巡らし尚意欲を見せる。

今年も中止よ　長崎　本田民子

お宮日(くんち)の過ぎればそろそろ冬支度されど宮日は今年も中止よ
二週間わが留守の間に干からびたコーヒーの木よかくも無残に
クローバーの四葉(よつば)を友の持ちくるる土手の散歩で見つけたからと
結納金貯めると言ってた男(お)の孫が指にリングをはめているなり
日に一度電話かけ来るわが娘守られる身に我はなりしか

・身辺のささやかな禍福を掬い上げ自身を慰藉する歌。

面会室　川越　満木好美

コロナ禍の行事はなべて中止なり凹凸のなき日々の過ぎゆく
温泉に「黙浴」「黙食」強いられてぼんやり眺む今宵の月を
マスクして面会室に母と会う半年ぶりに十五分だけ
はずむごと面会室に現れて去る時しぼむ母の顔なり
行列はいつしか消えて予約せずいつでも打てるコロナワクチン

・既に二年にもわたる疫禍の日々を記録し記憶する歌である。

母の手　東京　宮口弘美

台風が来るぞ来るぞとの報道に帰省の切符を幾度も取り出す
庭の木に絡みて憎しヤブガラシ引っこ抜きたり朝顔もろとも
防護服着せられて母と面会す素手で握れぬ老いた母の手
華麗なる変身重ね居酒屋がカレー屋になり弁当屋になる
何処へでも行けと首輪をはずされて走り出せないコロナの鎖

・三～五首目、コロナ禍がもたらす不如意な日々への怒り。

作品二、三特選

（一月号作品から）　香山静子選

〈作品二〉

犬を見ている　さいたま　丑山眞弓

生まれたるみかんの木々に寄りて舞うカーテン越しの小さなアゲハ
次々と出てくるティッシュで遊ぶ猫の画面をながめる犬を見ている
人との縁切ってしまえばそれまでの絡まる糸を解して進む
本当の己を晒すは貴女だけひとり静かに鏡に向かう

・命あるものに寄せる思いが熱く、三、四首目は微妙な心理。

心の隅まで　東京　加瀬喜美江

真っ赤なダリアの広がる畑の道ああ黒土が負けず光りぬ
行ってみたい宇宙旅行はまだ遠い五百円十個ずつ十年積まん
ある夜は心の隅までドビュッシーの「月の光」に照らされ眠る
ジュリア・ロバーツの美しき口に憧れてマスクの下で口角挙上

・前向きの姿勢が歌に明るさをもたらしている。

黄花コスモス　横浜　庄司健造

ひもすがら雨にうつむく穂すすきにわれの齢を重ねておりぬ
さわやかな風の木道ブナの実の感触しばし足裏に残り
のほほんと生きて来たからのほほんと老いてゆくのさ死ぬものほほん
八枚の花びらいっぱい陽をうけて黄花コスモスいま盛りなり

・己の老いゆく姿をさりげなく植物に重ねている。

試し掘り　宇治　中井房江

真青なるすだち貰いていま少し大ぶりの秋刀魚スーパーに選る
家出でし子のマウンテンバイクはも夫乗りつぶす九月尽日
少しだけ試し掘りして戻しおく結希の芋掘りこの三株と
退院の母は入院前よりも世間を広げてきたと弟

・日々の生活を細々と描写している。

やさしき雨　東京　中村陽子

早秋のやさしき雨に包まれて優しき人を演じるわれは
朝日浴び北に歩けば西側に背を丸めたるわが影のあり
日を浴びてならんだ家々に行儀よくゴミの袋が置かれていたり
閉じられし園芸店の柵の向こう柿の実たわわに実っておりぬ

・歩む範囲から楽しみながら素材を発見している。

知恵比べ　愛媛　平川良枝

猪と知恵比べする日日続く小さな菜園安穏ならず

コロナより怖いと憂うる夜の道イノシシ出没日常となる
ウォーキングを昼に済ませて夜長し私の生活猪に合わせる
大行な野菜畑でないけれど分葱のおおかた猪に掘られつ

・読者を引き込む十分な力量を備えている。

宅建士試験　　さいたま　松沢　みどり

会場へ向かえる人の群れに入り傘差して行く試験当日
今年の試験は難しいとは聞いたけど　二時間で解いてゆく五十問
家に着く頃には解答速報が夜には合格推定点が
頑張った人だけに見えることがあると信じて今夜も机に向かう

・真剣に目標に向かう姿が目に浮かぶ

〈作品三〉

ひたすらに　　千葉　伊藤　久美子

望まれぬ事態を一途に待ちながら避難用スロープは秋雨に濡る
ひたすらに月の中にて餅をつく兎の様な生き方もいい
大空を泳げる雲の腹を見る我は名もなき藻草となりて

・作者の生き方に一つの信念が見える。

セミの声　　鎌倉　小笹　岐美子

ベランダに来て鳴くセミの声高し今日も一日雨降りやまず
寺庭のつくつく法師ゆっくりと経読むように鳴き終わりたり
鳥語あると語る学者は大きくて柔らかそうな耳をしており

・音に対して敏感な作者が見え隠れする。

出番　　尾道　柏原　貞雄

十月も夜の温度が下がらない早生のみかんの色づくはいつ
暑い夏どうやらここらで終了かこれからみかんの出番になるぞ
ひと夏をありがとうねと朝顔にお礼を言って片づけをする

・早生みかんの色づく頃を楽しみにしている作者。

うたたねの夢　　鎌倉　河野　慎二

定職のなき身を衒ふ癖などか幼し長者の宇宙旅行も
葡萄酒の夕べ女女しきかの俺を優しく殺すうたたねの夢
ゆめ風に靡かじ冷や飯食ふ俺のときに諾ふイエスの言葉

・作者の文学性を大いに楽しみにしている。

白き満月　　東京　田村　久美

中秋の名月　今宵みづからの満面の白き肌を晒せり
蓮の葉は葉脈もぴんと広げゐる太陽の光をすべて受けむと
蓮の葉の裏に水紋ゆらめきて光と風の戯れ映す

・対象をじっくりと観察している作者が見える。

嚥下体操　　三鷹　能城　春美

だんだんと祖母の寝顔に似てきたね母のかすかな寝息聞きつつ
ペコちゃんの舌を真似して右ひだり母の可愛い嚥下体操

・母親への限りない愛情が感じられる

村野次郎への旅（143）

大正期の「香蘭」（四）

千々和　久幸

「香蘭」昭和一年（大正十五年）二月号（第四巻第二號）を読んでいる。巻頭には前号に続き北原白秋の二頁に亘る「一家言」が掲載されており、この号の頁数は総数52頁。

「一家言」は「先輩」「先進と後學」「先發」「自他の位置」「知ると知らぬと」の五章から成っている。「先輩」「知ると知らぬと」からその一部を引く。

先輩とは必ずしも同門の先進をさすものとは限るまい。その道に於て一日の長があり、何らかの意義ある先蹤を成した人々に對しては、おのづからに保つべき後學の禮節がなくてはなるまいと思はれる、他流の長老に對して君の如きを僕らは先輩とは思はないなどと豪語する年少者は卑しまれていい。

（先輩）

知るは畏れの初めである。いよいよ知り、いよいよ畏れるものである。知らざるが故に臆面も無いのであらう。よくもああしたことが云へたものだと、つくづくその顔が見られる時に當人は一向に平氣であるので驚く。知らぬうちこそ花である。

（知ると知らぬと）

内容はしごく当然のことが記されているのだが、噛んで含めるような口調は配下の「香蘭」会員への戒めとも読める。また「禮節」「畏れ」のくだりは、いかにも白秋好みのボキャブラリー、フレーズと思って読んだ。

さて白秋の短歌は「一家言」のすぐ後に「青き林檎」十首、そして村野先生は同欄の最後に「こがらし」六首が掲載されている。白秋の十首を転載しておこう。作品の前に付された詞書にはこうある。

青き林檎　　北原　白秋

北海道深川町の郊外、音江村にさる林檎畠あり。たまたま町のK氏と訪ねるに、今は人妻ながらそのKのそのかみの戀人なりと云ふ女性ありて、茶を供し、まだ小さき林檎などむく。我もただ庭を見、池をながめて、言葉なくゐぬ。（日光二月號の『音江村』参照）

・寂しくてなにかまぶしき日のくもり青き林檎をながめぬにけり
・林檎園なにか目につくわくら葉のわづかに染めし日中なりけり
・うすうすと林檎の梢葉（うれは）そめにけり百舌の翔（かけ）りもいまだ暑きを
・障子しめて閑けき綠や時あかる蜜蜂の翅音そこら響かふ
・風たちて涼しく皺む池の面に百日草の影もうつれり
役場の前のさる歌人の牛飼の家にて
・音江村一覽表をもらひたり役場のまへの鶉豆の花
・直土（ひたつち）に子らかき坐り夏おそし種人蔘の立枯れの花
・暮おそし蟲除（よ）け菊のしろき花いまはつぶさに見て歩むなり

深川郊外

・遠山に白虹降りゐ閑かなりこの石狩の國の大きさ

・やちたもの木の裏見れば白壁の照りかへし陽も時過ぎにけり

歌い出しこそ手持無沙汰な様子が窺えるが、徐々に四囲に目を凝らし詩心を高め歌にひろがりの見えてくる過程が興味深い。

こがらし　　村野　次郎

・朝の日のややに及べる庭の面の霜とけて土のうごきつつ見ゆ

・をさなごの衣物はどこが焚火くさし凩（こがらし）の外より歸り來れり

・貨物自動車家内ゆるがし歳（ママ）ぎにけり疲れ目めざし夜半と思ふに

別に病とてはなく、八十八の老母、眠るが如くみまかりたり

・生くるべき命をすべて生きながらへ静に人は死にゆきにけり

・人逝きて物音もなきわが家の日暮れの室に電燈（ひ）がともり居り

・人ゆきて今はあらざるこの室の畳のくぼみ眼につきにけり

どの歌も事実に即して丁寧に歌われている。白秋の歌もそうだが、わたしたちは白秋ならその門下の次郎なら、もっと奔放で華やかで飛躍、連想を含んだ想像力豊かな作品を期待しがちだが、それは作歌の一面を覗いて全体を語るに等しい。

世上、わたしたちが白秋や次郎に期待する作品は、このような地味で辛抱強いデッサンの積み重ねの頂きに生まれる、恵まれた数首に過ぎないということになろうか。

白秋ほどの天才にしてこうであってみれば、わたしたちのような凡庸な歌人の刊行する歌集のごときは、採れる歌がせいぜい十首もあれば上々と言わねばなるまい。

いささか雑駁な意見になったが、二月号の先を読むことにする。

目次を見ておけば、北原白秋「一家言」以下、「短歌」欄には北原白秋、杉浦翠子、池上秋石、石野正太郎、橋本政一、清原齊、島田旭彦、荒木暢夫、南草萌、本間樂寛、橋本敏夫、柿谷伸、深野庫之助、村野次郎。

次いで「詠進歌を讀て」（村野次郎）、「短歌」南部若麿、松丸貞一、川村浩、成田憲三、加藤直一、河野紫行、日根まもる、山田苓。橋本敏夫「短歌の統一といふ事」。

さらに如月集（短歌）出詠者　十二名。前月歌壇月評（橋本敏夫、杉浦翠子、矢代東村、村野次郎）、淡雪集（短歌）出詠者、十六名。本間樂寛「香蘭の歩み來し道（二）、白梅集（短歌）出詠者、十七名。

次郎先生の「編輯後記」を抄録する。

思はぬことの爲めに今月は少し遅刊して諸君に申し譯がない。一月廿六日、養母は八十八歳の天壽を全ふして死なれてしまつた。其爲め殆と出來上がつた編輯を何うすることも出來なかつた。（中略）

庭の冬木には細い時雨が降つてゐる。年寄のなくなつた、この廣い屋根にはあわただしい日を過ごして私と四才の幼児とだけの家族である。外には本間君と女中二人居る。弟も試験が濟めば兄の家に歸るであらう。私も之から銀座の店に出かけて外國への手紙を書かねばならない。